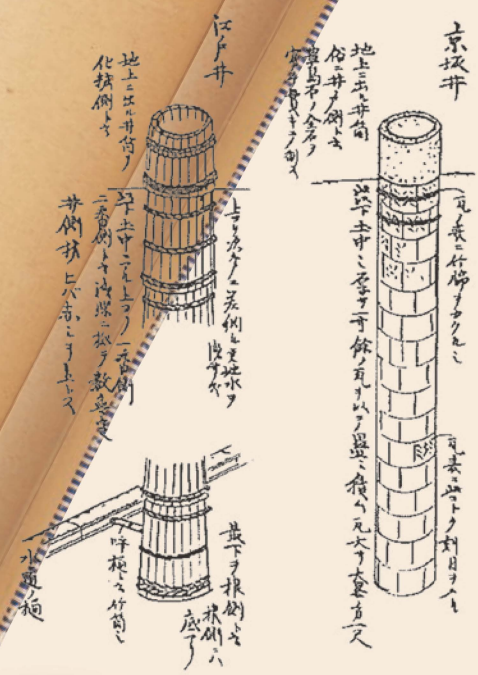




平城宮跡資料館 平成30年度 冬期企画展

発掘された平城

2017
2018
▶ digging up ▶



2019. 2/2 ㊦ ▶▶ 3/31 ㊦

NO 584次 587次 593次

平城宮 東院地区

2017.2.6 - 2017.5.29
▶ 2017.4.24 - 2017.4.26 ▶
2017.10.2 - 2018.1.31

少しずつ分かってきた東院

調査が進む東院地区

平城宮跡の東張出部南半部を東院地区と呼びます。東院地区は、発掘調査によって存在が確認されたもので、平城宮跡の発掘調査史上、最大の発見の一つといわれています。奈良文化財研究所では、東院地区の調査を継続しておこなっており、これまでも東院庭園（1967年）、東院南門（1993年）、東院楼閣宮殿（1998年）などが発見されています。

東院地区には、首皇子（のちの聖武天皇）の東宮、称徳天皇の東院玉殿、光仁天皇の楊梅宮などの宮殿があったとされることから、これらの確認も大きな課題となっています。

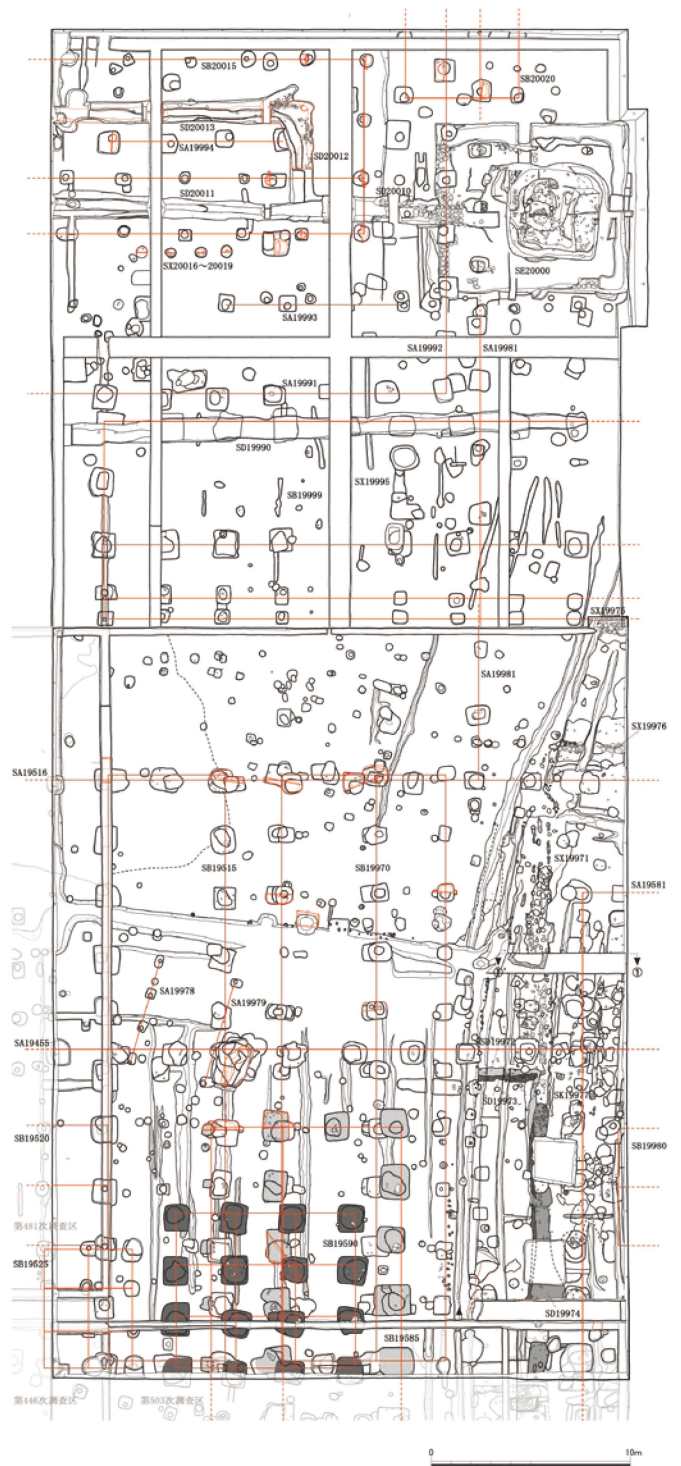
2017・2018年度は、第584次、第593次として東院地区の中央やや北寄りの範囲を集中的に調査しました。

発見された遺構

東院地区では、6期に区分される遺構が、幾重にも重なって密に分布しています。

今回の調査でも各期のたくさんの遺構を検出しました。特に、奈良時代前半（1期）の東西に2棟並んだ、南北29.6m、東西5.9mの細長い南北棟建物（SB19515、SB19970）や、奈良時代後半（3～5期）の井戸（SE20000）は注目に値します。

井戸は、井戸枠掘方が4.6m四方、その周囲に石組溝や、礎石建ちの井戸屋形（南北6m、東西5.4m）をもち、宮内でも最大級の規模をほこります。



東院の図面
（第584次、第593次調査）

東院地区の

時期区分

- 1期 (奈良時代前半)
- 2期 (天平17年[745]の平城遷都直後)
- 3期 (天平勝宝年間[749~757]頃)
- 4期 (天平宝字年間[757~765]頃)
- 5期 (天平神護・神護景雲年間[765~770]頃)
- 6期 (宝亀年間[770~780]以降)



東院の巨大井戸（東から）

井戸 (SE20000) 周辺からの出土品

SE20000から延びる溝（SD20011～20013）からは、奈良時代後半の多くの土器が出土しました。土師器の食器類が多いという宮内の一般的な傾向に対して、須恵器の食器類、須恵器の盤・甕、土師器の甕・竈などの調理具や貯蔵具が多いという特徴があります。井戸やその周辺の建物の性格を明らかにするための重要な手掛かりといえます。

SE20000周辺では、軒丸のきまる・軒平瓦のきひらがわら、鬼瓦おにがわら、施釉瓦せゆうを含む比較的多数の瓦も出土しています。これらは、井戸屋形に葺かれたものと言いたいところですが、もしかすると、周囲の未発掘の建物にともなうものかもしれません。今後の調査が期待されます。



第593次調査で出土した土器

2015.12.16 - 2016.3.30
 2016.3.8 - 2016.7.25
 2016.12.2 - 2017.1.31
 2016.11.14 - 2017.1.19

NO 552次 566次
 577次 578次
 朱雀門周辺・
 朱雀大路・二条大路

明らかになった朱雀門前の状況
 - 広場、道、溝、橋 -

朱雀門ひろばとその周辺の整備にともなう発掘調査です。朱雀大路と二条大路、そして、右京三条一坊一坪などの様子が明らかになりました。

朱雀大路に関しては、幅4.2~5.5mの西側溝(SD2600)を検出しました。これまでに検出していた東側溝のデータとあわせて、朱雀大路の幅は、側溝の心心間距離^{しんしんかんきょり}で73.3~73.7mであったことがわかりました。

また、西側溝は、二条大路を横切って北上し、二条大路北側溝と接続すると推定されていました。今回の調査により、二条大路を横切る西側溝は幅約3.0mで、しがらみで護岸^{ごあん}されていたこと、二条大路中軸線とその南北各9m程の位置に幅3.5~4.1mの3基の張出遺構^{はりだしいこう}(SX3440、SX3441、SX3442)が設置されていることがわかりました。

これらの張出遺構は、西側溝をまたぐ橋に関わるものと考えられていますが、橋脚^{きょうきゃく}を検出していません。水流調整など、別の機能をもつ可能性も残っています。



二条大路と朱雀大路を臨む角地である右京三条一坊一坪は、坪を南北に分割する坪内道路^{つばないどうろ}(SF3358)とその側溝が東西方向にはしるものの、周囲には築地塀などの区画施設がない広場であり、SF3358の東端^{ついでい}には、SD2600をまたぐ幅3.4m、長さ4m程度の橋(SX3355)がかかっていたことなどもわかりました。

朱雀大路をはさんで対称の位置にある左京三条一坊一坪も、井戸が設置された広場であることが確認されています。朱雀門の南は、二条大路、朱雀大路、右京・左京三条一坊一坪を利用した東西約260m、南北約140mという大きな広場となっていたのです。朱雀門前^{うたがき}では、歌垣や、外国使節の送迎などがおこなわれたことが記録されていますが、それらは、この広場を舞台としたものだったのです。

上 第578次発掘調査区全景(南西から)
 下 朱雀大路西側溝のしがらみ護岸



金属製人形



土馬



横櫛



帯金具

おこなわれていた祭祀

朱雀大路西側溝 (SD2600)では、^{ひとがた}人形、^{ふながた}舟形、^{いぐし}斎串、^{とば}土馬などの祭祀具が出土しました。SD2600と二条大路南側溝 (SD4006)の合流部の南3mの地点では、人形5点と土馬1点がまとまって出土し、当時、とりおこなわれたオマツリの様子を想像させます。

また、人形には、2点の銅製のものが含まれています。金属製人形は平城宮とその周辺を中心に出土していますが、出土例は少なく、天皇・皇族が使ったものとされています。今回のものも、それらと形がよく似ているうえ、朱雀門前という場所柄を考慮すると、同様の祭祀具といえそうです。

SD2600からは、^{どうせん}銅銭や^{おびかなぐ}帯金具 (^{まるども}丸鞆)、^{くし}櫛なども出土しました。これらは、一見すると溝に捨てたり、落としたりした一般的な遺物と思われるかもしれませんが、しかしながら、橋や道の交差点付近の溝からしばしば出土し、何らかのオマツリに関わるものとする研究者もいます。今回の事例もオマツリと関わる可能性があるかもしれません。

このほか、二条大路を横断する素掘の南北溝 (SD3600)からは、^{じんめんぼくしよどき}人面墨書土器が出土しました。



銅銭



人形

朱雀門前の整備について

今回明らかになった朱雀大路・二条大路やそれらの道路側溝、二条大路上の3基の張出遺構 (SX3440、SX3441、SX3442)、右京三条一坊一坪から朱雀大路にかかる橋 (SX3355) などについては、発掘調査の成果をもとに、現地に原寸大で遺構表示をしています。張出遺構の表示については、橋説に基づきます。朱雀門ひろばを訪れた折に、探してみてもいいかもしれません。



朱雀門前整備後の風景

NO 561次 585次

平城宮

第一次大極殿院

2015.12.14 - 2016.2.16
2017.4.10 - 2017.7.27

まだまだ新発見がある大極殿院！

第一次大極殿院だいごくてんいんの復原整備事業にともなう今回の調査は、南門と西面回廊の未発掘部分を対象に実施しました。

その結果、第561次調査により、Ⅱ期(奈良時代後半)の「西宮」南面築地回廊ついでしがいろうの基壇幅きだんが、従来の推定よりも大きくなる可能性が出てきました。また、第585次調査では、奈良時代の地形を復元するための重要なデータや、大極殿院全体や南門の造営や改造に関わる詳細なデータが得られました。



第585次調査 Kトレンチ全景（南から）

特別史跡平城宮跡では、遺構保護のため、朝堂院など左右対称の施設については、東側半分しか発掘調査をしません。朱雀門や第一次大極殿正殿などのような大がかりな復原整備事業がおこなわれる場合は、その後の発掘調査が困難になるうえ、整備のために万全な情報を得るため、整備対象地の全面を事前に発掘調査します。

豆知識

NO 582次 583次

平城京

左京一条二坊十坪

2017.2.13 - 2017.3.3
2017.1.30 - 2017.2.15

工房があった？
金の粒も出土



冶金関連出土遺物

金の粒

平城宮の東、法華寺の北にあたる平城京左京一条二坊十坪の発掘調査。分譲住宅建設と個人住宅建設にともなうものです。

第583次調査では、2条の溝 (SD11090、SD11091) から、埴塼るつぼ、靴ふいごの羽口、炉壁などの破片や鉋滓はぐち、鍛造剥片ろへきなどの冶金関連遺物や、漆附着土器こうさいなどが多数出土しました。なかでも溶銅と金の粒は注目されます。溶銅は青銅製品を鑄造する際に生じた、余分に溶けた銅(湯)が固まったものと考えられます。

金の粒は、直径2.3mm、厚さ1.4mm、重量67mgと、とても小さなもの。鑄造時に生じたものか、何らかの装飾品の一部とみられます。どうやら、近くに工房があったようです。

豆知識

平城京跡は、全域が周知の埋蔵文化財包蔵地なので、工事をおこなう場合は届出が必要です。発掘調査が必要と判断された場合には、奈文研、奈良県、奈良市、大和郡山市が発掘調査を実施します。

NO 563次 571次 581次

平城京
左京二条二坊十一坪

2016.1.12 - 2016.3.31

▶ 2016.5.16 - 2016.6.21 ▶

2017.1.16 - 2017.1.20

宮外の役所？



第563次調査区全景（南から）

平城宮東院の南東すぐに位置する平城京左京二条二坊十一坪の発掘調査。これまでの成果から、この坪の第2期（奈良時代前半）は、坪の中軸に三棟の大型の東西棟建物が並び、その東西に南北棟建物を置く、コの字型、もしくは口の字型の建物配置をなすと推定していました。

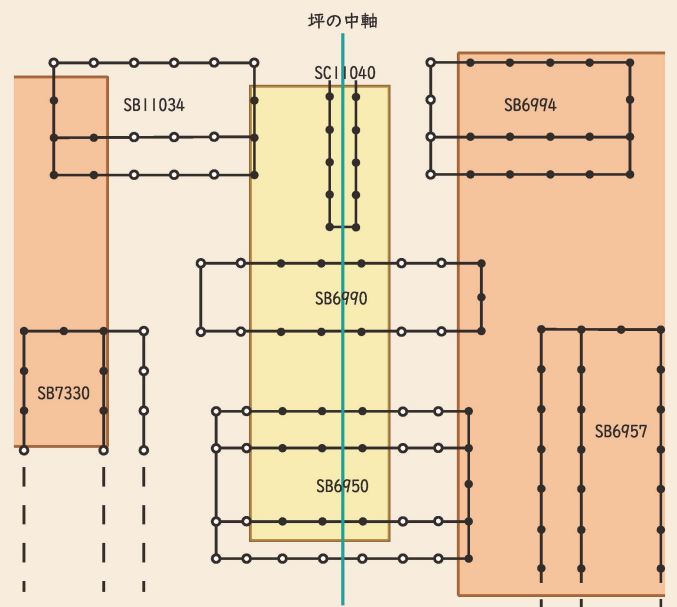
また、これまでの調査では施釉瓦^{せゆう}も集中して出土しており、この区画は宮外官衙のような施設であったとされてきました。

第563次調査では、坪の中軸線上に、3棟の東西建物群が想定される位置を発掘調査し、特に焦点となっていた2期に関して大きな成果をあげました。

調査の結果、中核となる東西棟建物群に想定されたうちの最北の1棟は、東西に離れて並ぶ2棟の東西棟建物（SB6994、SB11034）であり、この両棟間には、坪の中軸線上をはしる単廊^{たんろう}（SC11040）が設けられていたことがわかりました。これらから、2期におけるこの坪の中核部の建物配置を右図のように復元できました。

また、土器の年代や、後殿とみられる東西棟建物（SD6690）の礎板^{そばん}の年輪年代測定から、2期の建物群は720年代に建てられたと想定できました。

一方、坪の西北部を調査した第571次調査では、坪の北辺を区切る二条条間路南側溝（SD7100A・B）から、多くの須恵器・土師器^{りよくゆう}・緑釉瓦、木簡、硯類とともに、漆附着土器や漆刷毛などの工房に関わるような遺物も出土しました。この坪の性格とその変遷を考えるうえで重要な所見といえます。



第2期遺構図

- 第563次調査区
- これまでの調査区
- 検出した柱穴
- 想定される柱穴

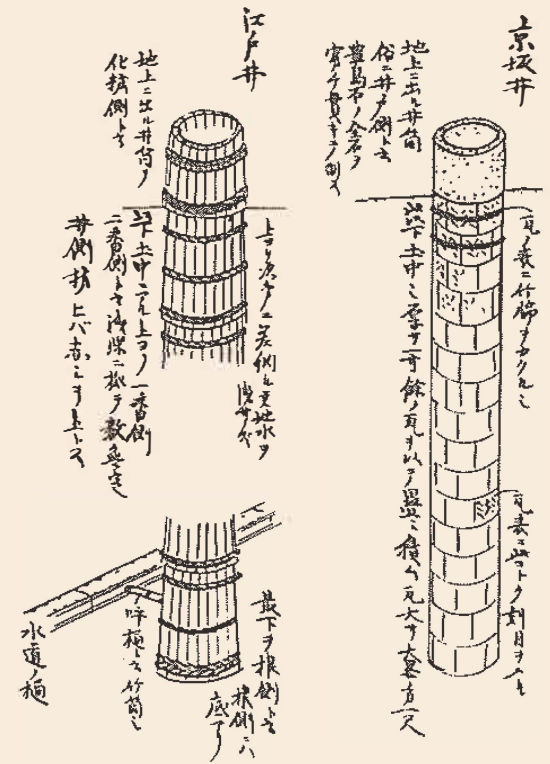
▶ 2016.8.1 - 2016.8.25 ▶

NO 575次
法華寺旧境内

『守貞漫稿』の井戸

『守貞漫稿』は、江戸時代後期の大阪商人喜多川守貞（1810～？）が当時の江戸・京都・大阪の風俗、事物を記録解説した百科事典のような書物です。その中に登場する京阪に特徴的な井戸を、法華寺旧境内の発掘調査で検出しました。これは、井戸底に設置した桶の上に磚を円形に積み上げたもので、積み上げた磚は、幅24cm、高さ27cm、厚さ3cm、外面に綾杉状の刻み目が施されています。積み上げ方、刻み目がつけられた磚の形状は『守貞漫稿』に記載のとおりです。

ここでは、大きな甕を埋設した遺構2基もみつっています。そのうちの1基の甕中には土師器皿2枚が置かれていました。これらの埋甕遺構の性格は、いまのところ不明です。



「京阪井と江戸井の図」
（『合本自筆影印守貞漫稿』、東京堂出版より）

NO 567次
興福寺境内

▶ 2016.5.25 - 2016.7.20 ▶

泥塔とは？

防災工事にもなう南大門南西の西門守屋跡の発掘調査。門守屋とは門の警備のための施設で、以前検出した東門守屋とほぼ対称な平面形態や、奈良時代前半から11世紀後半ないし12世紀初頭という存続期間の見通しなどを得ることができました。

中近世から現代までの土器・陶器類、平安時代の瓦などにまじって、泥塔の破片1点が出土しました。両面に付着する金雲母は塗られたものかもしれません。



出土した泥塔（実寸の1.5倍）

泥塔は、泥土を型抜きにして塔形に成形し、焼成したもので、大量生産され、経筒とともに埋納されたり、寺院に奉納されたりしました。たくさん納める場合と少数を納める場合があるようで、この事例は後者のようです。今回出土したものは、15世紀から17世紀初頭のものであり、三重県伊賀盆地から奈良県を中心に分布します。よく似たものが明日香村橋寺からも出土しました。中世から近世初頭のこの地域の信仰を考える手がかりといえます。